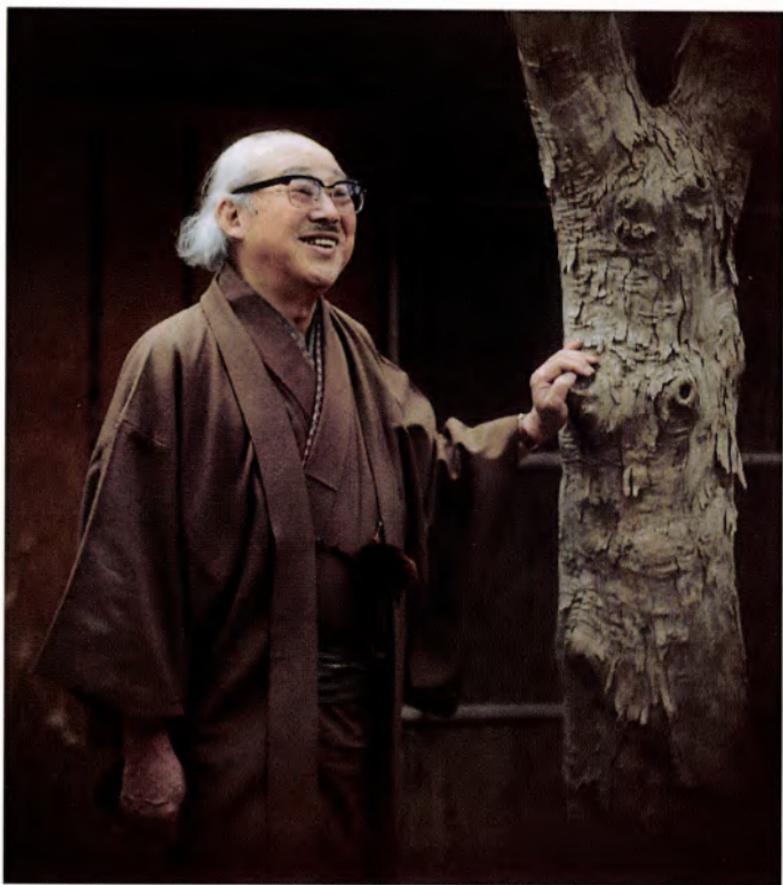


西尾葉句集

和顏
愛語



西尾 栞 自宅にて

西尾 葉句集

和顏愛語

序 文

河 内 天 笑

平成十三年五月五日、八尾グランドホテルにおける西尾栞七回忌川柳大会が催されるに際し、氏の膨大な川柳作品集から六〇〇句を選び、橘高薫風名誉主幹編による「和顔愛語」を上梓することが、三月の常任理事会で満場一致で決まったのは誠によるこぼしく、記念品と共に当日参加者にお届けできるのは意義深いものがあります。

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

栞

平成五年七月、香川県白鳥町にこの句碑が建立されたのをご存知のお方も多いことでしょう。

昭和六年八月二十五日、麻生路郎先生指導による大阪大学医学部の教授はじめ、事務局の方々に構成する「阪大川柳会」の第一回句会が開かれました。その日の席題「温泉」で見事に抜かれたいわくのある作品です。栞先生は明治四十二年三月六日、啓蟄のお生まれですから指折り数えますと当時は二十二歳華の青年であったことになり

ます。それ以前に俳句を嗜まれたのを加味しましても、生涯に残る作品の一つをこの若さで成し得た逸材ぶりは、後に川柳塔を背負って立つその人であったのも頷けます。「啓蟄」のちつは覚えにくい字でつしゃろ「幸せな丸虫」と書いたらよろしねんといつかの柳話で教えて下さいました。また、平成元年秋、高野山に建立された川柳塔碑の碑文には「俱会一処」の見出しで

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を語りあう絆を以て此処に愉しく眠る

平成元年秋

川柳塔主幹 西尾 栞

という名文を達筆で刻まれており、毎年秋の合祀祭にこの碑文とお会い出来るのもわれわれの大いにたのしみとするところです。

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

薰 風

栞先生の「温泉や」の句碑が立った同じ日に、同じ白鳥町の少し離れたところに建立された句碑です。栞先生の句碑ともども是非、ご覧になってください。

もくじ

序 文……………河内 天笑…2

和顔愛語……………5

あとがきに代えて……………板尾 岳人…130

著者略歴

和顔愛語元旦の心しる

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

輪にふいて其の後に来るもの考える

若旦那女将が出ると他愛なし

何にでも効く温泉へ目をつむり

見送りに坊やを高くさし上げる

留守居して失業の日を思い出し

留守番を買って出たのは外ならず

本妻の方が粹だという噂

こんな字を書いてもらうに墨をすり

デカメロン読むに書斎にとじこもり

椅子はあいたが市長の椅子だとさ

掌で唇ふいて昼の酒

羽左に似た耳で長男かしこまり

人生四十染直しよく似合い

父 ・ 母

初めて「父」という題で作った句

頭ほど光らぬ父でありにけり

岳父昭和三十一年八月二十七日歿

時計のような生涯とじた七十一

臨終は手塩にかけた掌を握り

岳父昭和十七年一月四日歿

戦捷の春の臨終安かりき

マニラ陥落きいて享年六十九

ソファアーに刀自という名のかさひくし

矢倉寿司だっせと遠い耳へきかし

親子二代のへんくつに母は老い

張り替えた障子の中に母います

木の芽あえ母すこやかに八十九

母昭和四十一年十月十四日歿

手提袋持たす寝棺にまた哭きぬ

鯨幕の上に万朶の秋桜

母逝きて七日の鐘の冷えて来る

河内の灯

習いたての手品は妻にしてみせる

アベックに違いはないが五十八

添寝して父の無情を唄にする

おつうじのあつた話題も老夫婦

老妻に手を貸す梅の径でよし

時雨よし河内のはての灯を守る

紅葉寺明治の夫婦手をつなぎ

燃えもせずさめもやらずに珊瑚婚

悟れる如く諦める如く老夫婦

家族風呂

皿割った音を奥さん寝間できき

意見する儂がまだまだ遊びたし

孫が来て碁石がたりぬ駒がない

巻ずしの中だけ食べる祖母育ち

染め直し昔の生地をほめられる

五人目の孫抱く力余りけり

それぞれにスポンサーがあり孫達者

ギヴアンドテイク

判取をしいしい容態きいてくれ

セールスは譬え話をたんともち

交渉はギヴァンドテイクの肚でいる

操短の工場の上の揚雲雀

ひがんできけば機械の音も借金借金

菜の花の中の工場は閉めてあり

或る日

飛び乗りの今度は切符さがし出し

鯉節水晶の型にかかれたり

踏切まできて鶏引き返し

一筆の富士は漢詩でうめ合わせ

仮縫いのお世辞前から後ろから

誰にきいても知らん知らんという袂

おまえ使っていたんかという袂

挨拶のものをもらった声となり

家出の娘に叱らん説と叱る説

案内はここで笑わすせりふあり

お向いと話してお隣に妬かれ

御近所が舌打ちをする家が建ち

水煙あげて神輿は洗うもの

札束を肌の温みのままで出し

首洗池蛙観海流で逃げ

皇太子さんでもとントン拍子なり

昭和三十七年十二月五日工場全焼

焼け跡で星を見上げている広さ

スタミナがどうのこうのと普茶料理

琥珀色の湯呑の主は生字引

敬老敬老とタクシーへ押しこまれ

カメラアイ蜻蛉の目玉蝶の髭

天ぷら屋この腕という長い箸

スラスラと特許番号香具師は言い

茶と苺 苺とお茶で萎びてる

首巻をとる真似だけの家主なり

ターミナル再会という名の喫茶店

うりざね顔質素な家に生まれて来

骸骨の講義骸骨横をむき

雀の涙ほどとは貰う方

差し押さえ金庫の上の鏡餅

旅　　枕

人恋し人煩わし波の音

イメージの踊り子もみず伊豆の秋

桑の葉をたたいてバスの行き違い

盃に島の唄ありひとり旅

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来

河鹿きく妻も同んなじ宿浴衣

白樺の道 団体でゆくあほらしさ

滝を背に逆光線も已むを得ず

茶碗一つ置いて清水店きよみずとなり

河童橋写真を撮す順があり

日本ライン盃洗にして酌み交わし

一步出ずれば吾れ旅人となる心

プラットに佇った姿も旅のもの

船酔いへ港の見えたことを言い

訪 台

日本語で見送られ台湾語で迎えられ

燕翔ぶ港の街の旅鞆

逝く春を句便りにして独り旅

釣人も景色となった雨の滯

筏乗り絶景のところが忙しい

旅枕雨にしあれば雨の詩

土肥温泉

明日乗る汽船みている宿の窓

草の名でもめて吟行面白し

籐椅子のおく位置があり海が見え

団参の赤いリボンも春のもの

城跡から指さす馬場の花吹雪

一匹の蠅と夜汽車の旅にあり

二人降り一人が乗った雪の駅

新婚旅行にて

城崎の雪を相合傘で出る

溢れ出る温泉へ母 南無阿弥陀 南無阿弥陀

電灯の暗さ温泉効きそうな

白骨温泉

上求菩提下化衆生ここだ虫の声

介山碑の上音なしの秋の雲

孝行のしおさめという温泉につかり

露天風呂一葉浮かべているぬるさ

一年をこつこつ貯めて温泉につかり

晩酌

二次会で土産の鹿の角がとれ

お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし

酒仙とも言われ中毒とも言われ

おごられる方がトコ姐さん酒もってこい

晩酌の一杯だけは妻が酌ぎ

豆もろこ三日つづいた猪口を置き

ビール瓶の露のままなる酌うれし

健康法きけば盃もつ仕草

飲める身のケチな雪とはおもえども

彼は酔いマダムマダムを連呼する

ひとり酌めばいみじくもまた秋の雨

飲み友達飲むまでケチなことを言い

紅灯の夕べ

半玉に男ざかりの手をひかれ

腹違い舞妓になつていゝといふ

ワテが通りまっせといふ歩きぶり

鏡台へ西陽のきつい屋形にて

狸寝と女将はとうに知っている

芸者の耳うち高いものになり

スカンタコという声が大きい仲居部屋

段梯子女将眉間で何か言い

三味ひける姑で孫をよせつけず

相場拳三つ指ついた妓と見えず

四 季

元日や素直に鼻をふかすなり

辰年年頭所感

竜頭蛇尾となる一年の計を樹て

四十七になつても正月よろしおま

義理がたい人に元日起こされる

ポチ袋芝居好みを伯母は見せ

三ヶ日明治生れは寝るとする

昼寝から起きてマツチをふみつける

応接間の金魚逆立ちしてくれる

御陵から御陵につづく彼岸花

鯉幟の尻尾が天気変えるなり

寂光院コスモスの道菊の路

暗がりに梅の香と知る始発駅

遮断機の向うに信貴の花曇り

ラッパ飲みの彼方に湧いた雲の峯

平家村つめたい水の湧くところ

白砂青松夏だけ停まる駅という

急行の停まらぬ駅の良い桜

陽が落ちてから来た水着よく泳ぎ

あほくさとも言わず炬燵を猫は出る

路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍

花屑をあつめてボート屋暮れ残り

懸崖へ猫の尾がある良い日和

夕立は土の匂いがかがすなり

初入選西陽気づかう位置にあり

貨車一つほっとかれてる霜の朝

背泳へ入道雲は足の先

横町の雑音

蚊柱の崩れて検視五六人

靴磨き磨きたい靴前を行く

すし捨を出てぼん引きと肩並べ

万引の哀れ子供のもの許り

持って死ねなんだからしい銀行から櫛

大臣に紐がついてる阿呆らしさ

机へ脚のせてボーナスの話なり

有難い弔辞額にも入れられず

告別式おくれで哀れモーニング

見送りの時間をきいて遂に来ず

死んでまで薨去卒去と段があり

男ごころ

籐椅子に猿又の紐ゆるう居る

借りに来た友とは妻にきかすまじ

七光りですと養子如才なし

養子会作る話もそれつきり

総辞職男をたてたつもりなり

女ごころ

女もう暴君でないが気に入らず

あの晩の風邪よと女嬉しそう

市電代返すにもめる女連れ

朝の床ピンはパラパラ落ちるもの

ハンドバッグ迷える心パチつかせ

伊達巻の後ろ姿へ湖は暮れ

化粧なおす後ろ姿へ喫う煙草

ヨヨと泣いておいて他人さんへ嫁ぎ

持ち味を活かす化粧の濃ゆからず

OKと派手に別れた戎橋

チト低い鼻でサービスゆきとどき

美容院から帰りあわてまいことか

待ち呆けさすには惜しい美人居る

お坊ちゃんねと女逆らわず

ネツクレス修験者程に巻きつける

女連れ一人はなれた器量よし

良縁かどうか嫁く身がいつち知り

かき眉毛みみずくという顔になり

占いにわてもわてもと女連れ

二号と後妻貯める話に馬があい

挨拶は指のダイヤを見のがさず

恋

愛人として角砂糖の数も知り

四十の或る日の恋は落ち葉踏む

四十の恋は手形を割って逢い

逃げ腰で四十の恋をしてるなり

暇と金 金と暇とが食い違い

月の縁団扇くるくる回すだけ

ボートも二人ベンチも二人中之島

愛の巢は隣の音もよくきこえ

カステラと花束

病人の向うむいたをとがめまじ

七度二分見舞の客の好き嫌い

退院へ爪先ゆるい足袋をはき

お見舞に行けば一杯やっております

検温を潮時にした見舞客

食後すぐ薬のための飯のよう

北の護り

オーロラに煉瓦の街は哀しかり

馬上より指さす夏野ソ連領

姑娘の耳輪にふれる語らいや

空襲へ刺繍の靴は抱かれたり

鞭声肅々掖河を渡る鉄兜

野糞放るや大満洲の春の風

最後の味方

若う言うてくれた人を妻おぼえてい

ワイシャツを着かえることで妻ともめ

そうでつしやないかと女房逆らう気

遊走腎手術（明和病院にて）

病妻と別れる握手他人めき

手術二日女は化粧するとう

手を貸せば纏足めいた試歩の妻

最後の最後の味方は妻なりき

弱味を見せるなと妻の眼が合図

植木市妻は咲いてる方を買ひ

低血圧の妻の朝寝を咎めまじ

着せかけて帰りの時間きくは妻

酢昆布の匂いで妻にささやかれ

一男三女

長男誕生

初産へ神棚しかと灯をともし

子沢山蚊帳吊れば吊る騒ぎよう

感謝したりうるさがったり子沢山

四人目を抱いて器用に飯をつぎ

赤ん坊湯気のまんま抱き上げる

長女、三女昭和四十年十月に男子出産

ヨーイドン産声あげた孫二人

ようきいときやと妹ついでに叱られる

つぎつぎに寝顔のぞいて俺の子だ

油断がならぬとは伴のことであり

次女の死

平均寿命四十年を残し娘逝く

盂蘭盆会幸せうすき次女なりし

水 鶏 庵

鬼になりきれなかつた人生のたそがれる

八十五点という人生でありしよな

水すましに暫し忘我の我でよし

牛の瞳に人間何をあわてとる

口八丁自分の恥もさらけ出し

社長とは金融に走るものなるか

右書左楽音痴の俺は如何せむ

虞や虞や汝を如何せん四十八

還暦が自分であつた面白さ

命ある句命ある句とて寝てしまひ

優越感フト気がつけば一人なり

社長今日孤独の二字をかみしめる

浅間温泉にて

出湯の窓乗鞍常念指呼のうち

落人部落成程という目鼻立ち

古川柳の通りに指図風邪の妻

血圧を計りに来てる大三十日

駅弁の箸へ雪の立山真正面

まどろんで手形の夢とはあわれなり

バラ垣の主は戦争未亡人

かにかくにトレードマークとなりし髭

露天風呂月見草は手のとどくところ

夏休み指切り通り孫が来る

孫曾孫四十三人かこむ柩は祭めき

陽気なおばあちゃんやったと一七日

新聞に埋もれている風邪の床

日本に箸紙があり祝い膳

襟を正すという言葉を会長今日使い

娘のグループへ父の下手なしやれ

生前にきかせてやりたい弔辞です

現代人よ埴輪の顔をとり戻せ

慇懃無礼検札起すなり

交渉はなだめ役を一人つけ

葬いの型を破れぬ村に住む

掛け替える軸へ紅白歌合戦

起きる時間へ炬燵の温さ良い加減

アパートの一軒だけが豆をまき

約束を破る電話は妻にさせ

なかなかに見せ場とならぬストリップ

道行の見せ場はアイと返事する

世界は二人のためにあり天高し

腕組んだ思案を妻に見つめられ

クリスマス星の星倅せうすき手で作り

イメージはマドロスパイプ手放さず

後釜はやっぱり弔辞読んだ人

春うらら雀縄とびしてるよう

残業の大きな影がよく動き

信じ度し信じ度し金魚見つめて

昼寝場所いつしかきまる風の筋

書齋哀れ艾の匂いこもるなり

つゆ草をコップにさしてパンの朝

十二月フルカウントとなりにけり

元日の書齋水仙の黄に対す

胸に花今日は葬儀委員長

午前二時城下の誓いさせられる

艦隊の出動めきて鯉の列

釣人を傘ききてみる出湯の橋

シヨベルカー葶の花をすくいあげ

支那墨の香りうれしい俺の城

あととりがだんだん長い顔となり

気骨稜々はうつらぬレントゲン

老妻の日傘の派手をとがめまじ

浴衣着て初恋というものありしかな

水鶏庵の風鈴廂の高さより

好事家の遺品に家族チト困り

名月や重なる団地古城めき

元旦や酒禪一味の心知る

母者人炬燵のかさの尊けれ

帰り来て炬燵の母と対いけり

二日から書斎の癖をとりもどし

夫婦でも自慢話はききづらし

雁かりぎの絵をかく如しタクト振る

やっと二人になりましたたひかり号

投函の帰りの途の一杯さ

蟹の身をせせって故国の雪話

足腰のたつ間という旅だより

母のせてマイカー制限時速なり

蜘蛛の困を蜘蛛ゆさぶって蜘蛛も暇

旧友に歯科医のいるを思い出し

釘箱の釘大きすぎ小さすぎ

夕焼けに白壁の街落ちつかせ

天平の屋根そり返る秋の雲

栗ごはん囲炉裏の部屋で食べてよし

栗ごはん嫂の在所をたずねられ

栗ごはん遠くで発破の音がする

卓上の花もゆれてる大笑い

髭の社長菊の一鉢約束し

元日や米寿の母を囲む幸

元旦や我泰山の如く座す

六畳は我が城にして黄水仙

寄せ書きが円陣となる良い仲間

テトラポットあざらしに似て冬の海

もういつペン欺されましようと言おうと妻が言う

脱サラリーマン地下の喫茶がふと恋し

信玄のかくし湯ときく朧月

火元がわかって屋台飲みなおし

石段は記念写真を撮るところ

音痴もうここまできると拍手もの

母の日の米寿の母は家宝めき

神楽囃子墨絵のような森があり

夕月に誘われて出て恋でなし

二階から都会の顔の妻籠宿

漫才師電車の中で目をつむり

床の間の置物めきて母米寿

胸にバラ米寿の母は素直なり

めでたさは米寿の母が飲んで献し

せんば言葉で母は米寿の謝辞を言う

禅寺の薨の反りの蟬時雨

漬物がいっちおいしい老夫婦

白玉にまされる倅もて余し

読初めや句集旅人福寿草

夜長よし女房の趣味俺の趣味

一文にもならぬ川柳と妻は言う

ひそひそと話して親娘笑いだし

落人の耐えに耐えにしわらべ唄

鳥籠の鳥に小首をかしげられ

この期に及んで人參だニンニクだ

読者欄ここから活字小さくなり

たどたどしい日本語の詐欺にあい

男の指輪その人格を疑えり

祝 緑之助氏の句碑建立

出雲路の神話の句碑に風薫る

島の灯を指さす肩は抱きよし

ええとしをしてといわれた好奇心

母八十九歳心臓麻痺で死去

遮莫上手に母は逝きにけり

臨終のない死に死水あわてたり

堪えに堪えし嗚咽の堰の別れかな

灯明の奥に母あり梅雨の室

滝の音きこえてからの径けわし

あの頃はやさしかったと妻は言う

働いた色で夕陽も沈むなり

母歿し

お土産を買う楽しさが一つ減り

刀痕の柱の部屋の暗いこと

点と点つないで企画部長室

異色作家時々警察へも呼ばれ

吉報をフンフンフンときく書斎

ある距離を置いて師弟のつつがなし

暗然と拳を膝に通夜守る

約束をとぼける芸を社長もち

鴟の贅蛙泳ぎのまま蛙

母逝きて鋏の鈴とする対話

正座して墨する部屋の桜炭

能登にて

着ぶくれて塗師の無口とがむまじ

春や春揚羽の蝶の時国家

たのもしい後輩があり縄のれん

いささかの旅愁となった通り雨

宿の下駄うまいコーヒーないと知り

嫁と呼ぶ垣あり若く美しく

白羽の矢それから愛の鞭厳し

笑い合うは貧しさでなし雉子郎忌

伊豆下田にて

柿崎へ通うお吉に鳶の輪

貫禄は血压言うて先に去に

旨い河豚へ案内します娘婿

信州路にて

靴の雪地団駄踏んで落してる

雛の目の初恋人に似て楽し

隱岐吟行

逝く春や遠流の島の駅の鈴

御所二つ今も悲劇の帝たり

この家並ま昼を通るもと廓

倉庫番海に扉を開け放ち

板尾岳人君へ

雪月花金剛山は奥座敷

正弁丹吾父娘と見えぬ箸を割り

かき氷こころあたりはもと廓

せつのうちてせつのうちてサンダル履きで来

元旦の一步国旗を掲げに出る

長生きも芸のうちなり秋叙勲

レイかけて夢のハワイよ詩の島よ

屋根に落ち屋根より落ちし猫の恋

執念の人ときいたが肥えている

雛の絵の葉書で雛に招かれる

重文の兜の部屋の昼暗し

春の雨博物館の小半日

血圧にさわる放談して帰り

五十音で先に呼ばれた男なり

一瞬にきまる勝負が男好き

船渡御にせんばは鱧を焼く匂い

姉弟も二人となりし墓参り

温泉の音頭八十作雨情曲

乾杯へ日本大使背低し

シャンデリアここはお寺の応接間

イヤリング自分ではずす独り言

御題 海

おおらかな海元旦の酔い心地

柚子の里

山陵に詣でる我は甲斐源氏

踏切りの一番あとから乳母車

土鈴買う音あれこれや梅の宮

あっけなく入院初夜を眠りけり

見せてから包丁入れる明石鯛

桜吹雪一人歩けば主義もなし

補聴器でホトトギス聞く趣味の会

花いっぱい運動の東伯町にて

菊の奴菊の主となりにけり

抜劍の姿で銀將おどり出で

ナイターに六甲山の稲光り

のむ話になって見舞もほっとする

のろけてるうちに氷菓子はとけ

末席は上手に正信偈をあげる

いななきも中位なり古稀の春

幻の邪馬台でよし炉辺話

すゝむ忌や帽子の人が一人居る

カレーライスの一片の肉何時食べる

拗ねているうなじはほのと匂うなり

お互いに考えましよう波の音

喫茶店の隅で小さい儲け口

祭り客碁客になってしまいけり

ポーナスは妻の入歯に持ってかれ

髭が泣きまつせという値切りよう

駅裏の十歩余りの歳の市

啓蟄や今日はも古稀の誕生日

短冊にのる字で伝言板を書き

ライバルの祝電もよし披露宴

パジャマにもポケットがあり何入れる

空蟬や我七十の掌に

炎の如き言葉を吐いて淋しけれ

友だちが寄ると会の名が出来る

喫茶店喪の腕章をはずしあう

元旦や七十年の猿芝居

長生きをしてねとわかってきたらしい

湯豆腐を掬う夫婦を軽く妬く

秀才の家系に生れクリスチャン

潮騒の今はきこえぬ晶子の碑

七つ目の判で止まっている役所

血圧にわるい女といわれてる

二条駅燕ひるがえりひるがえり

金魚掬う金魚の柄の浴衣着て

ハーケンを打てば湧き出る雲の峰

古本屋の棚のほこりに意地があり

蒔きおわるまで鴉鳴かないことにする

ついに来た法師温泉虫の秋

碧の名の額あり冬の湯治宿

行灯に夢幻よ法師の湯

落語家の崩れた顔が今佳境

落語家の真面目な顔の死亡記事

塀沿いに二頭並んだ雨の鹿

糸底を撫でつつ話す去年今年

陽のあたるプラットホーム向い側

三ヶ日ホーム炬燵の酒仙かな

てつちりや路郎門下の生き残り

雛の鼻よくよく見ればあるのなり

木の芽和え文楽好きな母なりし

野仏のところを得たる登山口

俄遍路スケッチしたり拝んだり

船遊びユラユラ沈む落しもの

ダイヤ婚さてこれからののみ直し

新幹線隣は何をする人ぞ

初節句朝から来てる里の親

鳩一羽塔の高さも翔んでみせ

見事なる落椿武蔵の墓どころ

宴会で漢方薬のメモをとり

妻の背が母の背となる針仕事

百度石整いすぎし目鼻立ち

古稀とかや一步退く事に慣れ

子子ほうふらに意見をきけば沈みけり

もの書きの妻叱られて叱られて

ステツキをついて焼香の止めに立ち

羊飼いの少年になりたいと思う夕陽

扁額は書斎けうとし不死鳥忌

水打って端居の微醺不死鳥忌

細雪だんごの皿を二つ置く

紫陽花や色即是空昼の雨

マンシヨンの母の遺影に桃一果

喜寿やよし生かされました句集なる

憎さも憎し礼儀正しいライバルで

初旅や車中の声は雪の富士

初旅や伊豆は菜の花豆の花

ライバルの頭仲々禿げてこぬ

牡丹や我も湯客の一人なり

つまらないことおぼえている女房め

主人みずから出すは冷蔵庫のビール

くっしやみの出かける顔を見たりけり

蘇州哀しいずこも同じ水濁る

秋暑し魯迅の像はまばたかず

塔あれば影　人あれば旅の影

十二月舞台は紙の雪が降る

温泉で手形の指図するもよし

阿呆になつときなはれという母があり

月おぼろ背中合せの生返事

父の日のいでたち娘のプレゼント

金婚や河内茶粥と梅干と

枅酒の昂りもよし喜寿の宴

秋晴をたたえて哀れ病み上り

明治大正昭和を生きて共白髪

五十年上手に負けて恙なし

桃の花孤独の顔はなかりけり

桃の花解脱の僧の色話

風蘭や御僧の挨拶掌を合せ

口答え一つ失う耳飾り

かくれ家にポケットベルが鳴りひびく

薬漬川柳漬の余生かな

初詣で御菰樽にも手を合せ

丹前や七十八歳人嫌い

新年の挨拶塵紙交換氏

子供部屋静かに爆弾作ってる

伯母と叔母畳の部屋へ来て話し

エッセイスト手櫛で白髪かきあげる

鳴き竜の音のひびきも初詣

「こんなふうになりたい」本を読む二月

大寒の温さをいうて飲みにゆく

希望します陛下のお声重々し

清貧を貫く師父の詩心

自在鉤昔庄屋の旅籠かな

お浄土へ一筋道の秋の風

朗報や山茶花咲いた今朝の晴

家中で見る新聞の受章欄

コスモスや祝電のベル鳴り止まず

豊明殿妻と伺候の菊日和

記念写真お車寄せの広さかな

豊明殿しずしずと行く臣葉

黒髪のなげきも源氏物語

紅い靴一番安い肉を買う

玄関で嫁の言葉のゆきとどき

漫才のネタを国会今日も出し

路郎語録高野の奥の蝉時雨

川柳塔の下千万の虫の秋

熱爛や高野の塔に雪しきり

春の風川柳塔にふれてみる

おいしいコーヒー狭い階段のぼらされ

北の島を時々思い出す政府

焼香順まだ納まらぬ伯父が居る

老いの坂上れば花の奥の院

老いの坂振るステッキに風みどり

釣り花や言葉すくなのおもてなし

百合活けて気配り多き立居かな

こんなことで喜ぶ父は八十五

弓始め木履の音も春のもの

百までも生きる努力をする八十路

三面鏡の一面にある火の眼

鳩居堂出て八坂の塔のおぼろかな

カンナ咲くわが血の音をきく如し

菜の花の暮れずにおわす野の仏

玄関にソクラテスの妻が立っている

天平の薨尊し春の星

大寺の鴟尾仰ぐとき歩を正す

大寺の灯ともし頃を浄土かな

バスタオル巻いてハイハイという電話

ポケットベル会議中退堂々と

受付でどなっているのは父の声

文楽から泣いて帰って茶漬食べ

クーラーに鼻つまらせた老夫婦

文字読まぬ今日一日の不倖せ

陰膳のお箸に母のひとり言

箸を拝んで母のこと父のこと

皇室の写真笑顔に声がない

寝転んでPKOって何だっけ

花曜 酔曜 黙曜とて盃をもち

ふつふつと葱とどじょうの仲の味

窓際の椅子だんだんと人嫌い

獺祭の片肱枕子規の城

漱石の城代家老無位の猫

恋文を扇子で書いている小朝

角さんの扇子の風の機嫌かな

送り出す妻の言葉を大切に

魯山人の器にもった茄子の色

老夫婦鬼も逃げない声でまき

得手に帆をあげたまんまの過労死か

はなれ小島のように気高くいる女

山寺の一夜こんにやく問答など如何

お師匠さんに習うたのは女癖

落葉掃くもう人間にあきました

大家族母に残したとろろ汁

藪柑子故里近き暮の道

命の恩人へいつしか賀状だけとなり

葉 先生は生きている

愛する人、親しい人の死を見るにつれて死の恐怖はかえって薄らぐようです。

先生が彼岸へ旅立たれてから満六年、親父が逝った時も、母が死んだ時も泣かなかつた僕は、先生の訃報を聞いた時、尽きぬ涙に嗚咽しました。するとほっとするものを感じ、清浄なものが胸元をぐつと突き上げ、目頭が次第に曇って来たものです。

先生のような方でも亡くなられるということは、僕は信仰心を持つ人間ですが、謎のような気がしてなりませんでした。それは先生に対する神聖な義務を果たしていなかったのかも知れません。

一歩出ずれば吾れ旅人となる心

牛の瞳に人間何をあわてとる

先生、彼岸での暮らしはいかがですか。此岸では先生の好きな花の乱、さわやかな

皐月です。

この度、先生の七回忌という節目に、とても魅力的な宝石箱のような句集を上梓することができました。

人生の大切なものが次々と失われて行く世の中ですが、先生からの贈り物として先生の蘊蓄を傾けた句集をみなさまに手渡せる喜びを抱きながらペンを握っております。

人恋し人煩わし波の音

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

この句集が読む人の心をとらえ、人々に愛読して頂けたらこの上もない喜びです。今や先生の温容と馥郁たる警咳に接することはできませんが、後進も多く育ち、先生の作品に啓発される同人が跡を絶たない川柳塔万歳です。

最後の最後の味方は妻なりき

風さわやか 皐月

板尾岳人

著者略歴

本名・西尾 巖（にしお いわお）。明治42年3月6日、富田林市富田林町に生まれる。

関西大学法学部中退、藤田銀行へ勤務したが戦後、七宝製菓（株）を設立する。

昭和6年、阪大川柳会へ入会し、川柳を本格的に始める。同31年、麻生路郎主宰の川柳雑誌不朽洞会理事長となり、同40年『川柳雑誌』を改題した『川柳塔』の副主幹に就く。同50年、日本川柳協会常任理事、同57年川柳塔社の理事長・主幹に就任する。

平成7年5月15日逝去。行年86歳

法名・水鶏院釈眞諦

著書に句集『水鶏笛』、句文集『水鶏庵こらむ散歩』ほかがある。

平成13年5月1日発行

西尾葉句集 和顔愛語

発行所 川 柳 塔 社
〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16
ウエムラ第2ビル 202号室
電話 (06) 6629-6914
振替 00980-5-33368

美研アート印刷